精神分析とトラウマ

今日は「精神分析とトラウマ」というテーマで発表をさせて頂きます。

トラウマという言葉はギリシャ語で傷という意味ですが、精神分析の創始者フロイトがそれを精神的な外傷という意味で使うようになって現在使われるような意味をもつようになったわけです。ですからそもそも精神分析はトラウマと言う概念と深い関係にある訳です。

ところが現代の精神医学、臨床心理学においてはトラウマと精神分析の関係は消去されてしまっており、だれもトラウマに対処するために精神分析を参照しようとするひとはいなくなっています。戦争、テロ、レイプなど現代社会の暴力的側面への人間の反応としてトラウマという言葉は日常的に耳にする言葉となりました。それとともにトラウマの真の意味は忘れられＰＴＳＤという言葉に表れているように、単に一種のストレスとして考えられるようになっています。しかしトラウマというものを理解するためには、起源に遡って精神分析的立場からもう一度トラウマと言う概念を考え直すことも必要でしょう。

フロイトとトラウマ

まずフロイトにおいてトラウマはどのように扱われているか見てみましょう。

フロイトは１８９６年の「ヒステリーの病因について」のなかでヒステリーの病因は外傷体験であるということを発見したのはヨーゼフ・ブロイアーだと言っています。

「ヒステリーの症状を疾病の発生史の証人として明るみに引き出そうとすると、どうしてもJ・ブロイアーの重要な発見と関係を持たざるをえません。すなわち、ヒステリーの症状はある種の外傷的作用をもつ体験によって決定されるのであって、その体験の記憶の象徴として症状が患者の精神生活の中で再生産されてくるのだ、という発見がそれです」\*[[1]](#footnote-1)。

そして症状を解消するには「ヒステリー症状から外傷体験の想起へと至る道程を発見すればよい」ということでした。

しかし実際の分析ではここで問題が生じます。分析によって明らかにされた外傷体験が、それ自体重要性もなく、症状を引き起こすような力は持ち合わせてはいないように思える場合が多いというのです。たとえば交通事故に遭って吐き気などのヒステリー症状を出す例です。

この点においてフロイトとブロイアーの考えは別れます。

ブロイアーは類催眠状態によって説明します。すなわち、「たとえ無害な体験でも、特殊な精神状態、いわゆる類催眠状態にある人物に加わると、外傷にまでたかめられ、決定づける力を発揮しうる」と考えたのでした。しかしフロイトは類催眠状態では十分な説明ができないと考えます。類催眠状態にどうして起こるのかが説明できず、類催眠状態を前提とする根拠に欠けるのです。

それにたいしてフロイトはブロイアーの考えをより徹底させて当てはめはめて考えようとします。まず最初に無害と見える体験が得られたとしても、そこで終わってはならない、分析を続けていけば、より深いところで別の真の外傷的体験を見いだすことができる、というものでした。つまり外傷体験とは二重の構造を持っている。まず最初に見かけ上の体験があり、その奥により深刻な、真の外傷をもたらす体験があるというものです。見かけ上の体験はその奥の体験と結ばれて作用するのです。これによって分析によって表面上は無害と見えるような外傷体験しか得られなくとも、その奥には症状を引き起こす力のある。外傷体験を得ることができ、ヒステリーの外傷論は救われるのです。

少し先取りですがこれはラカンのＳ１－Ｓ２というシニフィアン構造に結びつけることができます。

このような考えをもとに、１８８５年頃にはフロイトは次のような要素で構成される、最初のヒステリー理論を完成する。

１－ヒステリーは父親もしくは近親者の性的誘惑によるトラウマにがもとになって引きおこされる。

２－トラウマは常に性的な性格を持っている。

３－トラウマは遡及的に作用する。

　　S１―＞S2－＞Ｓ１

エマの例。店員の笑い→過去の想起商店の親父の性的いたずら→症状一人で店に入れない。ある回想が抑圧されずっと後になって遡行作用によって初めて外傷になる。

４－抑圧理論。トラウマの記憶は不快を呼び起こすので、快感原則によって支配されている他の記憶とは隔離され抑圧される。

これがneuroticaと呼ばれるフロイトの最初のヒステリー論の中核を構成する考えです。

しかしそれから少し経って、フロイトはこの理論を捨てることになります。

１９８７年９月２１日付けのフリースへの手紙の中で、フロイトは、この理論を否定する理由を説明しています。

フロイトがneuroticaを捨てた理由

１－トラウマを追求することの患者側からの拒否。分析が続けられない。

２－父親の倒錯的行為がそれほど多いとは考えにくい。

３－無意識では実際に起こったこととファンタスムの区別がつけられない。

４－精神病においては外傷の無意識的記憶を明らかにできない。

父親または近親者による性的誘惑によって生じた心的外傷がヒステリーの原因になるという理論をフロイトはここで捨てたわけです。そして、その代わりにくるのは幻想の理論です。外傷体験だと見なされていたものは実はファンタスムだという考えです。幼い子どもは父親のような人にたいして愛されたいと、かわいがってほしいという願望を抱く、だがこれは近親相姦的な願望であるので抑圧され、逆転されて誘惑されたというファンタスムになるのである。

したがって、トラウマはファンタスム、つまりフィクションだということになります。

ところがここでまた問題がひとつ生じます。トラウマがたんなるフィクションであるというなら、トラウマがどうしてつよい不安や様々な深刻な症状を生みだすのか理解することが困難となるでしょう。単なるフィクションであるなら、その苦しみから逃れるのには別のフィクションで対抗させればよいだけですから。それが主体を現実に苦しめるのはやはりそこにはフィクションを超えた何かの現実界との繋がりを考えることが必要となります。

フロイトはここでファンタスムを持ち出していますが、ファンタスムを単純にフィクションであると決めつける必要はありません。たとえファンタスムであろうと、何もないところからそれが生まれるわけではありません。ファンタスムにはファンタスムを構成する素材が必要なのです。では、そうした素材はどこから来るのでしょうか。それはやはり主体が出会った実際の出来事です。

したがって、よく言われる、フロイトはヒステリーの原因は外傷であるという考えを廃棄したという説は正しくありません。それまでの理論が

　－ 現実界に繋がるトラウマ→症状

という図式であったのにたいして、ここでは

　－現実界との遭遇→ファンタスム（トラウマ）→症状

という図式となるので。また神経症の原因としての性という要素はここでもずっと保持されています。したがって、ここにおける神経症についての理論は、誘惑理論に比してより現実的であり、かつより精緻な理論的把握を許すものとなっているのです。

neurotica以後の理論化において外傷的経験の重要さをよく示しているテクストは狼男の症例です。

フロイトは患者の神経症の背後には何らかの現実的な出来事との遭遇があったはずだという考えで、執拗に、そしてまた強引とまで感じられる手法をもって狼男の分析を推し進めました。その結果、分析の場で患者が提供する様々な素材から、患者は両親の性行為のシーン（原光景）を目撃したと結論するのであった。それもかなり具体的に、患者が一歳半のとき、ある日の夏の夕方五時に、両親は子どもの前で後背位による性交を行ったと断定するのです。そしてこれば患者の以後の人生にとって決定的な出来事となったと考えました。

フロイトがこれほどまでに強く原光景の実在性に執着したのは、トラウマを引き起こすのが単なるフィクションであるならば、トラウマがそれほどまでに強力な影響を及ぼすとは考えにくいからでした。そしてそれに関連して、ユングとの理論的な確執もありました。ユングにとって、無意識には元型というものが備わっており、原光景はそれを元に空想されるということになるでしょう。したがってユングにとっては現実的なとの出会いは必要ないのです。それにたいしてフロイトはあくまで原光景の体験の先行性を認めて、現実界との接触を保持しようとしたのだ。ユングはすべて観念の次元でかたづけようとするのに対して、フロイトは唯物論的に考えようとするのです。

オオカミ男の症例ではフロイトは分析を通して原光景を構築したのであって、直接トラウマとして得られたものではなかったという点に注目すべきです。

１９２０年には、フロイトは「快感原則の彼岸」発表し、死の欲動という概念を打ち出しました。これは人間には本質的に死に向かおうとする傾向があるという考えであり、フロイトの理論的展開の中でも非常に重要なターニングポイントでした。こうした理論的な方向転換のもとになった出来事のひとつは１９１４－１９１５年の戦争によって大量に罹患者の生じた戦争神経症についての考察がありました。それは戦争において傷害を負ったり、行動を共にしていた戦友の死を目のあたりにしたりした結果、様々な症状を見せるようになり、戦場に出向いて戦うことのできなくなった兵士たちの間で生じる現象でした。

戦争神経症では患者は外傷のシーンを反復して夢見ます。それは非常に苦痛を伴う夢であり、フロイトの夢理論－「夢は願望の充足である」という考えでは説明がつかないと考えたのです。それは苦痛体験への反復脅迫なのです。フロイトは人間の行動原則としてそれまで快感原則というものを採用していたのですが、こうした反復脅迫は快感原則に合致しない現象なのです。そこでフロイトは自分の精神分析理論をもう一度根底から考え直し、人間には何か不快なものに向かおうとするという根元的なマゾヒズムがあるのではないかと仮定し、それを死の欲動と名付けたのです。

死の欲動の採用によってフロイトの理論的構築は大きく変化し、死の欲動という仮説のもとそれまでの多くの観点に修正が与えられました。トラウマに関しても同様です。

フロイトはそれまではヒステリー症状と反復的な外傷の夢との違いを認めていませんでした。しかしここではそれまでの考えに修正が加えられます。

生体は外傷から自らを保護するバリアーをもっている。トラウマ的体験はそのバリアーを破ってしまう威力を持っている。ヒステリー症状も外傷から生体を守るバリアーの一つであるが、反復脅迫はそのバリアーが破られたことを意味するというのです。そして反復は、再び快感原則の支配を再確立するための作業である、とされたのです。

戦争神経症からトラウマを考えると二つの疑問点が生じます。

一つはトラウマの性的な性格である。フロイトはトラウマを引きおこした出来事に性的な性格を常に認めていましたが、戦争神経症に関して言えば、それを引き起こすトラウマは生命に危険をもたらすような出来事が問題になっており、そこに性的な性格を見いだすことが困難なのです。

もう一つは、トラウマの事後的な性格に関するもの。トラウマが生じるには、まず最初に何かの出来事が起こるが、それには明確な意味与えられずそのままに残されるという前提条件が必要です。たとえば幼児が性的なシーンに出会っても幼児はそれをある程度それまでの経験から受け止めるが、本質的に理解することができず、その経験は無意識のままに残される。こうした出来事は後に子どもがさまざまな経験を積むにつれて意味を与えられ、そうして初めてトラウマとして作用するということでした。これはシニフィアンの連鎖S1-S2の遡及効果と同じ構造をもっています。ところが戦争神経症の場合には生命の危険に直面したということ自体がトラウマになるようなのです。したがって、最初の出来事から直接トラウマが生じることになります。これはトラウマの事後性というものに疑問を投げかける問題です。

この疑問にもかかわらずトラウマの事後性という考えを保持するためには、外傷神経症の元になった体験にたいして、すでに何か原体験のようなものがあったということを想定する必要があるでしょう。もう一つの考え方は出来事と出来事のトラウマ化の間には時間が作用するという考えも可能です。つまり出来事に遭遇してしばらく経ってからそれがトラウマとして作用するという考えです。

第一の性に関する疑問点はフロイトも取りあげています。フロイトによると、生命の危険は結局ナルシシズムにたいする脅威であり、ナルシシズムは結局自分自身へのリビドー的備給なので、リビドーの性的な性格から、やはり戦争神経症も性的な性格を持ったトラウマが原因となる、というのです。

第二のトラウマの事後性についての疑問点についてはフロイトは取りあげておらず、問題にはならないようである。

フロイトのトラウマついての考えについて晩年においてはランクへの批判がありました。ランクは出生のトラウマをもっとも根源的なものとして考えましたが、フロイトはそれには賛同しませんでした。子どものにとって対象を失うことはトラウマの原因となるが、出生時には母親はまだ対象としては機能していないので出生は対象喪失には結びつかないというのです。

そしてフロイトは最終的に去勢不安を幼年時代に被るもっとも大きなトラウマの原因とみなしました。これは上の第二の疑問点と結びつけることができる考えです。

次にラカンにおけるトラウマの扱いに移ります。

ラカンの初期の精神分析理論は、簡単に要約すると、象徴界つまり言語と、想像界つまりイメージの世界との間の弁証法によって構成されています。そこにおいてトラウマはイメージ、想像的なものの固着だと考えられています。たとえばオオカミ男のトラウマは原光景というイメージでありそれが言語化されないままに固着して無意識に閉じ込められているというわけです。分析はそれを言語化して主体の言語構造に統合することです。無意識に残っている諸イメージは現実的なものréelでもなく、非現実的なものirréelでもなく、それは現実化されないものnon-realiséとしてあり、それを現実化するには承認という行為を必要とするのです。ここでは無意識を構成するものはイメージでありながらそれは潜在的にシニフィアンでもあるという曖昧性によって考えられています。この曖昧性がnon-réaliséという言葉に表されているのです。

この頃の理論は象徴界の優位性によって支配されており、イメージが言語化されることに対する本質的な障害は認められていません。つまりトラウマが言語によって解消されることは可能であるという考えです。ですからこれはかなり楽観的な理論化だいえるでしょう。

フロイトにおけるトラウマの考えにあるトラウマの事後性ということについては、ラカンはシニフィアンの遡及性、つまり最初のシニフィアンS1は次に来るシニフィアンS2によって意味的に決定されるという構造、すなわち主語は述語によって遡及的に決定されるということ、によって大変エレガントに説明しています。

反面、トラウマの性的な性格については余り前面には出されず、無意識の言語理論はかなりクリーンな理論化となっています。

性的な次元を考えるにはやはり現実界との結びつきを考えることが必要なのですが、ラカンが言語世界の彼岸に現実界を見、明確にトラウマをこの現実界との出会いと関連させるようになったのは１９５９年の「精神分析の倫理」のセミネールからです。ここでは母親の世界における未知な部分をフロイトに倣ってdas Dingと呼び、das Dingとの出会いが最初の主体的立場を決定させるトラウマ的体験となるとされています。

「Das Dingとは起源的に私が「シニフィエ－外」と呼ぼうとするものです。主体が自らの距離を保ち、ある関係様式、あらゆる抑圧以前の原始的情動、のうちに自らを構成するのは、このシニフィエ－外に関連して、そしてそれにたいするパトス的な関係に関連してです。・・・・われわれが時に「神経症選択」と呼ぶ、主体的オリエンテーションの最初の土台、最初の選択がこのdas Dingに関連してなされるのです\*[[2]](#footnote-2)」。

簡単に説明しますと、das Dingとの出会いは原始的な情動を生みだす。それはあらゆる抑圧以前の出来事である。そしてそのときに主体は自らの精神的構造を決定するというのです。具体的に言えば、その出会いを嫌悪として感ずるのがヒステリーであり、過剰な快感として受け取るのが強迫神経症、そしてそれを信じないのが精神病となるのです。ヒステリーの場合は性的誘惑に相当し、強迫神経症の場合には原光景、両親の性交シーンの目撃、に相当するのでしょう。

ラカンはここではフロイトのフリースへの手紙Ｋに参照しています。ですからあくまでフロイトに忠実であろうとしているわけです。

ただここでも、トラウマに関してフロイトが考える快感原則の彼岸で出会ったような疑問がわいてきます。トラウマが性的な意味を持っているというのはここでははっきりとしています。しかしトラウマの遡及的な性格が問題になってきます。Das　Dingとの出会いがあらゆる抑圧以前の原始的な情動を引き起こすというなら、それは外傷的体験から直接引き起こされたものと考えるべきなのでしょうか。ラカンはdas Dingとの二度目の遭遇とは言っていないのです。これはトラウマの遡及的性格と矛盾します。この矛盾を解消するためには再びdas Dingとの出会い以前の原体験というのを想定しなければならないのかもしれません。

トラウマについてのラカンの次の主要な考察は１９６４年の「精神分析の四基本概念」のセミネールの中でなされています。そこではアリストテレスから借りてきたチュケーtucheとオートマトンautomatonという概念が取り上げられ、オートマトンはシニフィアンのネットワークの自動運動、チュケーは現実界との出会い損ねがトラウマとして反復現象を引き起こすとされます。そして転移現象と反復現象ははっきりと区別されます。

したがってラカンにとって現実的なものle reelをどのように取り扱うかがトラウマを考える上で重要になってくるのです。

倫理のセミネールではdas Dingということばで現実界を考えようとしましたが、そこから対象aという記号が生みだされ、対象ａと現実界が結びつけられます。そしてその後、ラカンは現実的なものを不可能という言葉で表すようになりました。不可能とは象徴界、すなわち言語世界における不可能ということです。たとえばＡという命題とnon-Aという命題を同時に認めることは不可能です。この点においてゲーデルの不完全性定理は言語世界の不可能性を数学的に表したものだと言えましょう。ラカンは精神分析における不可能を「性的関係は存在しない」という命題で表しました。動物においては雄と雌の性的な行動様式は本能に書き込まれており、動物は本能的に性的関係を持つことができるます。ところが人間の男と女は類としての性的行動様式を与えられておらず、人間の性的活動は多様であり、様々な倒錯的傾向が認められます。男と女は性的行動様式を他者から学ばなければならないのです。そして性的行為の多くは生殖とは関係ない領域で繰り広げられています。ですから人間の言語世界には性的関係が書き込まれておらず、それが象徴界の穴として不可能を構成するのです。

この象徴界の穴としての不可能という現実的なとの出会いが、トラウマを引き起こす根元的な出来事だとラカンは考えます。

フロイトはトラウマは常に性的な性格を持っていると考えていましたが、その真の理由はここに認められるます。人間が性的なものに出会うとき、この性的関係の不可能という象徴界の穴にぶつかり、主体はそれが何であるかを言うことができず、文字通り言葉を失ってしまうのです。幼年期のこの経験は思春期の性の目覚めによって新しい意味が与えられます。フロイトは、人間の性の二つに分離されたこの性的現実は、主体の人生において決定的な意味を持っていると考えていました。ラカン的に言えば、性的関係の不可能との最初の出会いの潜在的トラウマが、思春期になって意味を与えられて事後的にトラウマとして構成されと言えるでしょう。

トラウマについてのフロイトとラカンの観点をかんたんに紹介したあとトラウマと主体性というテーマに映りたいと思います。

トラウマと主体性という組み合わせは奇妙なものに思えるかもしれません。トラウマというのは、主体がそれを経験するとき、まさに主体はそれにたいして何の主体的な行為もできずただ受動的に出来事を被るだけです。主体は何の準備もなく、不安さえも感じず、何も理解できないまま突然出来事に巻き込まれます。ですからトラウマ的体験に出会うときには主体性の欠如があるといえるでしょう。ではトラウマを語るにおいて主体性というものを問題にする必要はないのでしょうか。

ひとつの例を挙げてみましょう。これはすでに他のところでも紹介したものです\*[[3]](#footnote-3)。

1973年8月にストックホルムでの銀行強盗人質立てこもり事件が発生しました。その事件を有名にしたのは、人質解放後の捜査で、犯人が寝ている間に人質が警察に銃を向けるなど、人質が犯人に協力して警察に敵対する行動を取っていたことが判明したこと、そしてまた、解放後も人質が犯人をかばい警察に非協力的な証言を行ったほか、1人の人質が犯人に愛の告白をし結婚する事態になったことなどです。そこからストックホルム症候群と名付けられました。

これについてウィキペディアは次のように書いています。「犯人と人質が閉鎖空間で長時間非日常的体験を共有したことにより高いレベルで共感し、犯人達の心情や事件を起こさざるを得ない理由を聞くとそれに同情したりして、人質が犯人に信頼や愛情を感じるようになる。また「警察が突入すれば人質は全員殺害する」となれば、人質は警察が突入すると身の危険が生じるので突入を望まない。ゆえに人質を保護する側にある警察を敵視する心理に陥る。このような恐怖で支配された状況においては、犯人に対して反抗や嫌悪で対応するより、協力・信頼・好意で対応するほうが生存確率が高くなるため起こる心理的反応が原因と説明される。

上述のように、ストックホルム症候群は恐怖と生存本能に基づく自己欺瞞的心理操作（セルフ・マインドコントロール）であるため、通常は、人質解放後には、犯人に対する好意は憎悪へと変化する」。

しかしこうした心理学的説明ではどうして事件の後で犯人との結婚にまで至ったのかが説明できません。

フランスの分析家ジャン－ジャック・ゴログはこの事件について次のような解釈を与えています。「ストックホルム症候群は、主体が受動的に被った出来事に、それがあたかも自分自身の選択であるかのような意味を与えるという大きなメリットがある」

つまり、人間は偶然に被るトラウマに甘んじることはできない、運命にいたずらに引き回されるだけでは生きていけないということです。天からふってくるようにおこる人質事件の被害者であっても、そこで主体的な行為によって自分自身を関与させることでトラウマを逃れ事件を生きることができるのです。そこに主体的行為があったからこそ事件後結婚にまで至ったのです。人間の行為は行為をなした者の以後の言動をも決定するからです。

 もう一つの例は有名なフロイトの「糸巻き遊びの子ども」の例です。この例は「快感原則の彼岸」でフロイトが死の欲動を導入するための動機のひとつとしてあげています。人間に取ってもっとも大きなトラウマのひとつは母親からの離別でしょう。この子は母親がこの子を残してどこかに出かけるとすぐに紐の付いた糸巻きを投げオーオーオー「fortあっち」と叫び、つぎに糸巻きを取り戻してダー「Daここ」と嬉しそうに叫ぶのです。フロイトによると、子どもは母親の喪失を受動的に被るのだが、その苦しみを逃れるために子どもは離別のシーンを糸巻きによって能動的に再現し、あたかもそれは子ども自身が積極的に行った行為のように扱うのです。フロイトはこう言います「子どもたちは生活のうちにあって強い印象をあたえたものをすべて遊戯の中で反復すること、それによって印象の強さをしずめて、いわば、その場面の支配者となることは、明らかである\*[[4]](#footnote-4)」つまりトラウマ的体験たいして主体的に立ち回ることでトラウマによる苦痛をのがれることができると言うことです。これらの例が示すのはトラウマに対抗するには主体性というものが必要であるということです。

ラカンはこの子どもの遊びのなかの糸巻きを、子どもが自分自身から切り捨てる対象であると言っています。子どもはこうやって対象喪失を引き受け主体として母親から分離して生きていくのです。ここには対象と主体、ラカン用語では小文字のaと斜線を引かれたＳ/があります。 ラカンは対象と主体がある形で結びつくことをファンタスムと呼び、それをS/<>aという記号で記します。この子どもの遊びの中にはしたがってファンタスムの構造が見られるわけです。

トラウマとファンタスムの関係はすでに述べたようにフロイトにおいても重要な意味を持っています。フロイトが彼のneuroticaを捨てたときにトラウマとファンタスムの区別がつかなくなったということでした。これは語られたトラウマはすでにファンタスムだからです。ファンタスムとして構成されているトラウマ以前のトラウマ体験は直接語られることはありません。そこには何か言葉を超えたもの、現実的なものが含まれているからです。この現実的なものが外傷神経症において反復現象となり主体を苦しめるものです。ファンタスムはそこにイメージと言葉で構成されたベールをかぶせて、主体にトラウマ体験を生きる手段を与えてくれます。そしてファンタスムを作ることは主体的な行為なのです。

 トラウマと主体性の関係を見せてくれる例として、病理的な場から出てほかの領域をのぞいてみてもよいでしょう。これもすでにほかのところに紹介した例です\*[[5]](#footnote-5)。

　　ギリシャの数学のように有理数だけが扱われているところで一辺が１ｍの正方形の対角線の長さはいくらかという問いが出されると、数学の世界は非常に大きな混乱が生じる。なぜならこの問い自体は有理数の世界で立てられるにもかかわらず、有理数のなかで答えを出すことはできないからです。これは有理数世界に穴を穿つ問いなのです。これはギリシャの数学者にとってトラウマを与えるような事件であるが、いくらあがいたところで有理数の世界では正確な答えはでない。いろいろな解決の手段が提案されても、有理数の世界で留まっているうちはこの問いは執拗に自己を主張してくるでしょう。これはまさに数学の世界における現実界との出会い、そしてそれに伴う反復現象です。結局この答えは数学者がルート√という記号、シニフィアンを発明するしかないのです。一旦ルートという記号が発明されると数学の世界は有理数から無理数へと広がり、正方形の対角線の長さもｓ他の数と同列に扱われもう問題とはなりません。トラウマの反復現象はここで終焉するのです。数学の世界では主体性というものは直接数式には表れることはありません。しかし数学を支えているのはやはりルート記号を発明するような主体性なのです。

今日ではトラウマの問題はＰＴＳＤposttraumatic stress disorder心的外傷後ストレス障害として扱われています。ＰＴＳＤという観点では患者を主体としては見ず、単に被害者として扱い、その症状を臨床的に分類して有効な治療法を当てはめるという試みがなされます。そこでは各主体の固有性というものが無視されて、マニュアル化された対応が取られる傾向にあります。またそのときにトラウマを特別な体験だと見なすと、患者をトラウマ的現在に釘付けしてしまう危険があります。患者は過去のトラウマ的体験を現在のように生き続けています。トラウマが個人史上の過去の出来事とははならず、現在が永遠に続くのです。トラウマの魔力から抜け出すには、出来事に特権的な地位を与えず、単に過去のひとつの体験として葬る必要があります。ちょうど死者を葬りその上に墓を建てるようにです。それにはあくまで個的にそれぞれのケースの特異性に応じて、患者の主体性を引き出して作業させなければなりません。精神分析の作業がまさにそれに当たるのです。

向井雅明　　２０１４／０１／２５

1. \*「ヒステリーの病因について」フロイト、１８８６年 [↑](#footnote-ref-1)
2. \*『精神分析の倫理』、セミネール第７巻、ラカン、岩波書店 [↑](#footnote-ref-2)
3. \*２０１２年１２月ラカン協会における発表 [↑](#footnote-ref-3)
4. \*「快感原則の彼岸」１５８ｐ [↑](#footnote-ref-4)
5. \*『考える足』、向井雅明、岩波書店 [↑](#footnote-ref-5)